

【ひとめぐり紀行】

第5回 地面の下をのぞいてみたら

「毎日が謎解き」。大学院で研究に取り組む日々を一言で表現するとしたら、そんな言葉をあてはめることができるかもしれない。とはいえ、アカデミアに残らない限り、その日常を手放す日がいつかは訪れる。大学院を修了したなら、往々にして自身の専門分野とは無縁の世界へ飛び込んでいかなければならない文系の大学院生を待ち受けているのは、いったいどんなものだろう？ それは、これまでとはあまりにかけ離れた世界かもしれない。

しかし、大学院を修了してもなお謎解きを続ける人がいる。北海道くちやんちやう倶知安町にある小川原おがわらしやう脩記念美術館で学芸員を務める沼田ぬまたえみ絵美さんだ。沼田さんが歩んできた道はちょっぴりふしぎ。

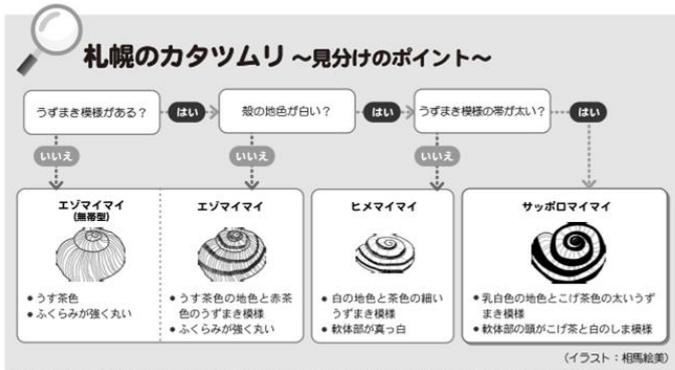
今回は、そんな沼田さんご自身の謎を紐解く旅に出かけよう。



美術館の入り口に足を踏み入れると、ひとつの作品に出迎えられたような気持ちになる。何にもさえぎられることなく羊蹄山を見渡すことのできる一面のガラス窓は、まるで大きなキャンパスのようだ。その左側にある受付の向こうからひょこりと姿を現したが、沼田絵美さんである。

沼田さんは現在、小川原脩記念美術館の学芸員として、展覧会の準備や作品の解説、作品管理のほか、美術館の広報などにも携わっている。しかし、美術の世界に飛び込んだのは8年前のこと。美術館勤務以前に勤めたことがあるのは自然史系の博物館であり、大学で専攻していたのも地理学だった。お話の端々に地理的な知識がにじむのは、きっとその積み重ねがあるからだろう。

意外なことに、美術以外の分野の出身で美術館学芸員を務める人は珍しくないようだ。もともとの専門ではない美術の世界でも、いきいきとする沼田さん。どうやらそのひみつは、沼田さんの足元に眠っているらしい。地層のように積み重なった過去の歴史を掘りおこしてのぞいてみると、そのはじめは学生時代にまでさかのぼる――。



※カタツムリの外見は個体差が大きく、ここでは図鑑にもとづき、それぞれの種の間や、珍しい個体で分けています。あてはまらないカタツムリを見つけたら、実物や写真を持って活動センターへ。観察した後は、捕まえたものと同様に返してください。

札幌市博物館活動センターの情報紙『Muse Letter』(<https://www.city.sapporo.jp/museum/museletter/index.html>)では、当時沼田さんが書いた記事を読むことができる。(上：2007.12 No.31、左：2008.8 No.34)

小さな生きもの、大事な宝もの ～札幌産カタツムリの調査と観察日記～

カタツムリのかくれんぼ

転ばたびたび、自然の中のカタツムリに会いに、大きな公園や林に立ち寄り、カタツムリ好きの輪が広がっているのか、サッポロマイマイなどの目撃情報も寄せられ、それをもとに、南区の正面の高野別荘の野幌森林公園でカタツムリ調査をしてみました。獲れているのは、種名が分からなくなっているカタツムリには出会えませんが、殻に入っているようにじっとしているサッポロマイマイ、エゾマイマイなどを何匹か見つけることができました。

一転して、雨の日になると、ササの葉の上を行き来する。無数のオオムラサギ、落ち葉におおわれた地面を這い回るヒメマイマイ、サッポロマイマイは木の幹や葉と似た色で目立たない。エゾマイマイはフキやササの葉といった低い場所にいる。種類によって、置かれている場所には好みがあるようです。サッポロマイマイの殻は目立ちやすいが、ハルニレやザワザワミ、イタヤカエデといった木の幹にいます。おもしろいほどよく環境に馴染んでいます(写真)。

どこ？

これは、面白い？

観察日記

さて、札幌に生息するカタツムリには、エゾマイマイ、サッポロマイマイ、ヒメマイマイなどがありますが、実は、みんな沼津の産物というわけではありません。北方系のエゾマイマイ、ヒメマイマイ、南方系のサッポロマイマイと、北別々の方向から北海道へ分佈を辿ってきたのです。氷河期に現在の海峽が閉鎖となった時代に、北海道へやってきたと考えられています。こんなにつくつくとしか進めない生き物が、よくそんな大移動をやったのけたなと感心していたら、「氷河期は少なくとも数万年は続いていたからね」と古河守真。カタツムリの分佈には、社大の物語が隠されているようです。(沼田)

【参考文献】
● 室 智(1982)日本の陸産貝類の分布系統(動物と自然)10(1)33
● 藤原 康樹・片倉 靖雄(1993)北海道陸産貝類(2)『北海道の自然と生物』

はじまりは

カタツムリ?!

学部卒業後、2年の社会人経験を挟んで大学院に進学した沼田さんは、当時2つの顔を持っていた。ひとつは地理学者のタマゴ、そしてもうひとつは「札幌市博物館活動センター」(以下、博物館センター)の展示解説員である。当初は札幌市役所の事務職として採用されたが、学部時代に学芸員資格を取得していたこともあり、のちに博物館センターの展示解説員として採用されることになったのだった。

博物館センターで過ごした時間を「すごく楽しかったんですね」とふりかえる。沼田さんが大学院で取り組んでいた研究分野は都市化や人口動態を扱う「都市地理学」だったが、自然史系の施設である博物館センターで扱うのは、人の住むまちの土台となる自然だ。札幌市の地質や地層、自然史などを博物館センターのなかで勉強し、来館者の方に向けて解説ができるまでになっていった。

そんななか、あるひとつの研究対象との出会いが訪れた。博物館センターに来館した男

の子によって持ち込まれた「カタツムリ」である。

「このカタツムリ、なんていうの？」

男の子にそう問いかけられ、図鑑を開いて調べてみると、「サッポロマイマイ」という種類のカタツムリであることがわかった。

それまでカタツムリに種類があることを漠然としかとらえていなかった沼田さんの前に突如として現れた、「札幌」の地名と、美しく特徴的な見た目をもつカタツムリ。一度興味を惹かれると、夢中になって勉強を始めた。カタツムリの勉強や観察を進めるなかで、自分が「おもしろい！」と思ったことをメモに残したり、それら子どもたち向けのレターとして配布するようになると、博物館センターでの仕事はどんどん充実したものになっていった。

取材中、マスクをしていて表情はあまり見えないものの、サッポロマイマイについて語る沼田さんの声はきらきらと輝いていて、当時どれほど夢中になっていたのかがひしひしと伝わってきた。ひとつの研究対象を深く追求し、そのおもしろさを他者に伝えた経験は、のちに沼田さんと美術の世界をつなぐ礎となるものだった。



つながる世界、 はじまりのとき

博物館センターでの3年の任期を終えると、長く暮らした札幌を離れ、ご主人の住む倶知安町へと移住することに。スノーボードが好きで、学生時代にニセコエリアを何度か訪れたことがあった沼田さんにとって、生活の拠点が倶知安町に移ることは苦ではなかったようだ。

加えて、移住にあたっての安心感につながったのは、町の美術館・博物館の存在だった。現在沼田さんが勤めている「小川原脩記念美術館」のすぐそばには、倶知安周辺の自然や歴史に関する総合博物館である「倶知安風土館」が建っている。そこでの勤務はすぐには叶わないかもしれない。しかし、これらの施設が身近にあることは、今後も美術館や博物館の世界とのつながりを持ち続けられることを意味していた。

そして、沼田さんと美術館や博物館の世界が重なる瞬間は、意外にも早く訪れることになる。移住から数年後、さまざまなお縁が重なって、小川原脩記念美術館の学芸員の仕事を

を手伝わないかとオファーがあったのだ。

美術の勉強はゼロからのスタート。そこで沼田さんの背中を押ししたのは、博物館センターで過ごした時間だった。

「博物館活動センターの準備室のときに、知らないところに飛び込んで行って、何かひとつきつけかをつかんで、すぐのめりこんだり、楽しかったりしたことを人に伝えたいという経験があったので、きっとそういうおもしろさを何かつかみとって、伝えるっていう



ことはきっとできると思うって。」

こうして沼田さんは、新たに美術の世界へ飛び込むことを決意したのだった。

とはいえ、小川原脩を知ったのは倶知安町に移住したあとのこと。はじめてふれる美術の世界、そして小川原の作品とどのように向き合っているのだろうか？

新たな世界ではじまる 謎解きの日々

小川原作品を見た当初の印象を「最初はやっぱりわかりやすい絵ではないなあとちょっと思ってたんですけどね」とふりかえる。そんな沼田さんの関心を引いたのは、当時、アジアの風景を描いた80年代の作品の展覧会と同時に開催していた、60年代の作品の展示だった。水墨画のようなやわらかな印象の80年代の作品に対し、60年代の作品は絵具の盛り上がりやに富む抽象画。同じ作家とは思えない両者の違いに驚きを覚えた。

沼田さんに衝撃を与えた60年代の作品のなかでも、「これなんか最初に興味を惹かれたと思って」と、画集を開いて指さした



よ り み ち ノ ー ト

倶知安町 (くっちゃんちょう)

北海道の西部に位置する、人口およそ1万5000人のまち。

自然豊かで、冬季はスキー・スノーボード目的に、国内外から多くの人を訪れる。

倶知安町、ニセコ町、蘭越町を合わせた地域は「ニセコエリア」ともよばれる。

小川原 脩 (おがわら・しゅう) 1911年～2002年



Shu Ogawara

1911年、北海道虻田郡倶知安村(現・倶知安町)に生まれる。

東京美術学校(現・東京藝術大学)卒業後、前衛画家としての道を歩みはじめるが、戦時体制の強化に伴い表現活動への規制が厳しくなり断念。

戦後は郷里倶知安に戻り、以後60数年間この土地を離れることなく創作活動に専念。60歳を超えてから訪れた中国、チベット、インドで創作への新しい境地を切りひらく。

(<https://www.town.kutchan.hokkaido.jp/culture-sports/ogawara-museum/>)

小川原脩記念美術館

倶知安町立の美術館。1999年に開館してからの収蔵作品は、小川原脩の初期から晩年にいたるコレクション約700点、その他、道内外の作家による作品が約80点に達する。ワークショップ、ミュージアム・シネマ、ミュージアム・コンサートを開催するなど、教育普及活動も意欲的に展開している。

(http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/sum/senjijin/ogawara_syu/index.htm)

のは、丸と三角だけが描かれている『街衢』(がいく)という作品だ。石器をモチーフとしたこの作品は、縄文遺跡の発掘に参加するほど考古学に夢中だった当時の小川原の姿を浮かび上がらせる。さらに沼田さんによると、同時代のほかの作品は絵の具の凹凸のあるものが多いなか、この作品には薄く平面的な塗りや、白い絵の具で余白をつくるような日本画的な要素が唐突に現れるのだという。時代によって変化する画風。突如として現れる異質な表現方法。作品から垣間見えるみえる小川原自身の姿。奥深く、追究しがいのある作品と、ドラマチックな小川原の人生は、沼田さんを惹きつけるのに十分だった。

偶然にも、取材当時に展示されていたのは小川原の80年代・90年代の作品たち。60年代に描かれた『街衢』と、これらの作品との違いを目の当たりにし、まさに当時の沼田さんが感じた「この人何者なんだろう?」という疑問を追体験するようであった。

小川原や彼の作品について、沼田さんは「今も全部を解き明かしきれっていない」と語る。絵画のほかに、旅行の紀行文なども新聞に寄稿していたという小川原。「いまだに新しい資料がぱっと出てくる」ことがあるとい

う。

「一回、目を通したはずの文章のちょっとした言葉が、『あっ、これ、このあいだじっくりみた絵のことふりかえってる言葉だ』って、あとになって自分のなかでつながったりとか。毎日謎解きしてるみたい。そういう楽しさを絵画作品にも見つけてしまったので。」

そう言って笑う沼田さんの声は、博物館センター時代に夢中になったカタツムリについて語ったときのもと同じだった。

学びのなかで

見つけたもの

沼田さんが美術の世界で見つけた楽しさは、小川原の作品や彼自身の謎を紐解くことだけではなかった。絵画作品を前に「対話する」ことである。

町内の中学校の美術科の鑑賞の単元のひとつとして行われる「鑑賞授業」も沼田さんのお仕事のひとつ。中学一年生の生徒が実際に美術館を訪れて絵画の鑑賞を行う時間を、沼田さんが担当している。

サケの放流

美術館を訪れるのは、地域の方にとどまらず、国内の観光客の方や、ウィンタースポーツを楽しみに訪れた外国からの観光客の方も多いという。そのなかでも、今後美術館への来館客として今沼田さんが期待を寄せるのは、現在の中高生だ。

俱知安町には大学などの高等教育機関がないため、高校卒業後に進学する生徒たちは一度、この町を離れることになる。鑑賞授業のなかで美術館へ足を運んだり、絵画を楽しんだ経験が、のちに美術の世界とつなぐ架け橋になることを沼田さんは期待している。

「出て行った先で、ほかの美術館に行ってみたり、1回経験があるところがうと思う。美術を生活の一部にまではできなくても、よそ事ではなくて自分でもかかわれることなんだよって思って、思ってまたこのまちに戻ってきたときに美術館にふらっときてくれたりっていう。」

それを「サケの放流って呼んでるんですけど」と笑う沼田さん。6年前、最初に沼田さんが鑑賞授業を受け持った生徒は現在高校3年生。数年後が楽しみである。



近年、鑑賞の世界では、ファシリテーターと鑑賞者が対話しながら作品を鑑賞する「対話型鑑賞法」に注目が集まっているようだ。そこでは「何がみえますか?」、「何がありませんか?」という問いを軸に、作品をみながら鑑賞者自身が作品のなかに意味を発見していく。現在、沼田さんは美術館を活用した鑑賞教育の指導者研修を受講するなどして専門的な知識を身につけながら、鑑賞授業のなかで対話による鑑賞を実践している。

作品の解説はもちろんのこと、取材中も丁寧でわかりやすく、お話上手な沼田さん。だが、沼田さんはご自身のことを「すぐく頭の回転が鈍くてですね、話があんまりうまくないので」と語る。しかし、だからこそその場で対話をしながら作品を鑑賞することに楽しさを見出したようだ。「何がみえますか?」そう問いかけるたびに、自分自身も一度見方をリセットして、ほかの人といっしょに小川原作品の新しい意味をつくっていく。その楽しさは、対話による鑑賞の学びを自分で深めるうちに出てきたものだを教えてくれた。

そして、鑑賞教育についての学びは美術館での新たな取り組みへとつながりつつある。対話による鑑賞は、これまでその経験がない

人でも「年齢関係なく新たに踏み込める」ものだと考えた沼田さんは、現在一般の方を対象とした対話による鑑賞の企画を温めている真つただ中だ。実は、今年の2月に開催していた特別展に合わせて対話による鑑賞会を実施する予定だったが、新型コロナウイルス感染症の影響で休館を余儀なくされ、実現は叶わなかった。昨今の状況を鑑みると、たくさんの人を集めて実施するのはまだまだ難しいのが実情だ。そのようななかでも、少人数で実現できる形を模索している。

地続きの世界の向こう

一般の来館者の方に向けた鑑賞会をはじめ、学校の授業で美術館や作品を活用してもらうためのアピール、展覧会で展示する作品のモチーフに合わせたお菓子の開発・販売など、沼田さんの夢は尽きない。お話をうかがうなかで、「実はこんなこともしてみたいんです」という希望がいくつも浮かび上がってくる。それらを実現するためにクリアしなければならぬ壁はあるが、いくつもの夢を語るよきの沼田さんは、ご自身がこれまで夢中

になったものを語るときと同じくらいきらきらしていた。

「やっぱりまちとか人の住むところって、自然の上にのっかっているんですよ」と、取材中つぶやいた沼田さん。現在の沼田さんの足元にも、たくさん経験が積み重なっている。博物館センターでの学び、のめりこめる研究対象との出会い、そのおもしろさを伝えたこと。絵画の世界とのつながり、そこで見つけた楽しさと、終わらない謎解き。それらは学生時代の研究活動とは直接結びついてはいないけれど、たしかに層をなして沼田さんの足元を支える地盤を形づくっている。そして、そこに重なる夢の数々が、ひとつ、またひとつと新たな層をつくり続けているのだ。

大学院を巣立った先にあるのはきつと、地続きの世界。一見するとまったく別々に見える道も、その足元をのぞいてみれば、これまでの謎解きの日々が幾重にも積み重なってどこまでも続いている。その道を行くとき、のめりこめる何かに出会えたなら、それを見つけることをやめなければ、謎解きの日々は終わることはないのだ。

(田代華奈子・北海道大学文学院 修士課程2年)

